

自尊感情が低下した高機能自閉症のある中学3年生の生徒に対し、校内の支援体制を整備して指導を行った事例

1. 事例の概要

A生徒は、高機能自閉症（アスペルガー症候群）があり、B中学校の3年生で自閉症・情緒学級に在籍している。入学時の学力は、学年内において上位であったが、学力の遅れと低下が見られるようになり、自己肯定感や自尊感情が著しく失われた。学校では、A生徒に対する教育的ニーズに十分に答えきれず、中学2年時には教員との信頼関係が喪失し、他の生徒との間でトラブルを起こし、極度の心理的不安定さが見られるようになった。この状況を改善するため、中学2年時の2学期に保護者が専門機関へ相談したことが切っ掛けとなり、専門機関と学校が連携してA生徒の障害に対する理解を図り、指導や支援についての具体的なアドバイスを専門家から受けながら改善に向けての取組を行った。A生徒は、高校進学を希望しており、進路先を決定するために、中学3年時においては生活面や学習面の改善、心理的な安定、自己肯定感や自尊感情の回復を図るための取組を行った。

キーワード 自己肯定感、自尊感情、心理的な安定、関係機関との連携

2. 生徒の実態

A生徒は、高機能自閉症（アスペルガー症候群）であり、学習能力の高さから特別支援学級に在籍しながらも、自立活動以外については、交流学級において他の生徒と共に学ぶ体制がとられた。入学当初は学年の生徒の中でも上位の学力であったが、A生徒が興味・関心の高い教科以外ではほぼ居眠りをする状態であったため、次第に学習の遅れを招き、A生徒が興味・関心のある教科（国語と社会）以外の教科では学力の低下が目立つようになった。

また、A生徒は、コミュニケーションが苦手で、級友とのトラブルを引き起こすこともある。規則に対する解釈や判断も自己流で解釈するため、生徒指導の対象となり、注意を受けることも多い。このため、A生徒の自尊感情や自己肯定感が低下し、教員との信頼関係も失われ、中学2年の3学期には、教員との関係の悪化から、学習について拒否的態度が見られるようになった。

中学校卒業後、A生徒は高校進学を希望している。

3. 本事例に関する基礎的環境整備

- B中学校のあるC市では、特別支援教育の推進を図るために、全ての幼稚園、保育所、学校にコーディネーターを配置している。また、各中学校校区にまとめ役としてリーダーコーディネーターが配置され、定期的に会議を開き、児童生徒の情報交換等を行っている。【基礎1】
- B中学校では、校内に特別支援教育「特別支援チーム」を編成し、個別の対応ができる体制づくりを行っている。【基礎2】
- 自立活動の時間の教材として、制作活動や体験的活動につながる教材を作成し、

活用している。【基礎4】

- 各教科担任の空き時間を活用して、校内学習指導体制を構築している。【基礎7】

4. 合意形成のプロセス

A生徒の保護者から支援の申出があった。内容は、専門機関と学校が連携して、A生徒に対する障害理解を深めて欲しいこと、個別指導をして欲しいこと、できることや良い行いを認め、褒めて欲しいことであった。その申出を受け、学校では、具体的な指導や支援の手立てを講じるために、学校職員や合理的配慮協力員、C市のあるD県発達障害者支援センター相談員が連携して、A生徒について毎月観察し、検討を行い、支援事項を決定した上で教育実践を行ってきた。また、学級担任も保護者と情報交換を行うことでA生徒に対する支援の合意形成を図った。

5. 合理的配慮の実際

- 学習や活動の時間を明確に指示し、タイマーの活用により集中力を高めた。【合理①-1-1】
- 自己肯定感を高める手立てとして、学習での取組に対して、良い面を記述し、評価することとした。【合理①-1-1】
- 50分の授業時間を学習内容によって区切り、学習内容を変化させ、持続できるようにした。【合理①-1-2】
- 他の生徒と協力し合う喜びを感じてもらうため、国語の時間に漢字の部首を組み合わせるカードゲームを取り入れた。【合理①-2-1】
- A生徒の自己肯定感を高めるために、難しい課題を解かせ、課題ができれば褒める取組を行った。【合理①-2-3】
- 校内コーディネーターが、教職員に対して、専門機関との協議内容や実践内容を、校内研修等を通して伝達し、A生徒への認識・理解を深めた。【合理②-2】

6. 本事例の成果と課題

D県発達障害者支援センター相談員の協力を得て、校内のコーディネーターをリーダーとしたチームで、特別支援学級担任の指導・支援の実践をサポートする体制をとるとともに、相談員からA生徒の障害から生じる困難さについてきめ細かくアドバイスを受け、手立ての内容を検討し実践したことによって、A生徒は心理的に安定し、学習に対する取組も改善されてきた。障害から生じる課題の克服については自立活動の時間等に指導を行い、学習面については学習の遅れを補う基礎的・基本的な内容及び受験に備えた学習内容を組み合わせた指導を行うことによって、第一志望の高校へ合格することができた。

A生徒に対する指導・支援は、高校進学のみを目標にしたのではなく、将来において、自己の障害を自覚し、生きる力を備えることを目指してきた。今後も、更なる自尊感情や自己肯定感の育成、他者とのコミュニケーション能力の向上、自己の生活リズムのコントロール等を身に付けさせることなどが挙げられる。